

まちの情景と建築

田中 修一

日本編

神々の攻防

荒ぶる神スサノオと祇園祭 京都・祇園 八坂の塔／法観寺



テレビドラマでおなじみの情景なので、ご記憶の方も多いただろう。スサノオを祀る八坂神社から石畳の路地沿いに見える京都のシンボル。高さ40mと京都駅南口にある東寺の五重塔よりはやや低い、周辺に高い建物がないので目立つ上に形が美しい。八坂の塔というので八坂神社に由来するのかと思ってしまうが、神社の境内からは離れた場所にある。この塔の由来は、聖徳太子が舍利(釈迦の遺骨)3粒を奉納するためにできた寺だとする。現在は臨済宗建仁寺派の寺である。

◀ 八坂神社南門から八坂の塔を望む (法観寺)

スサノオはアマテラスの弟なのだが、父のイザナギに海原の支配者に任じられても言うことを聞かず、姉を頼って天上で居候をしていた。しかしそこで乱暴狼藉を働いたために地上に追放されてしまう。下った先が出雲で、折から現れたヤマタノオロチを退治し、人身御供にされるどころだったクシナダ姫を嫁にとってこの地域を平定し、出雲の国の繁栄の基を築く。その後自らは根の固す国(冥界)に引退し、地元の神に支配を任せる。その6代目がスサノオの娘スセリ姫を嫁にした大国主命である。だからオオクニヌシはスサノオの義理の息子と言うことになる。

この地域周辺に祇園甲・乙・先斗町・木屋町などの色街が密集したのは、荒ぶる神スサノオを鎮めるために京都3大祭りのひとつ、夏8月の祇園祭(悪霊退散祈願)が始まったことに起因する(ちなみに他の二つは、春5月の葵祭=下鴨神社~上賀茂神社へ御所

からの勅使の行列、秋10月の時代祭り=御所から平安神宮へ時代装束行列、を指す)。

備後国の風土記によると、ある村を訪れた乞食が一夜の宿を頼んだ。貧しい兄の蘇民将来は温かく迎え、豊かな弟の巨丹将来は追い返した。数年後にまたやってきて同じことを繰り返す。その乞食は「我は牛頭天皇ござてんのうである、またの名をスサノオと言う。弟の一族は根絶やしにしよう。兄はよい人間なので災厄を免れるようにこの茅の輪を門口に掲げよ。悪霊は通り過ぎるであろう」。正月飾りはここから来た(旧約聖書の出エジプト記の脱出前夜の「過ぎ越しの祭り」のシチュエーションと驚くほどよく似ている。曰く、門口に生贄の羊の血を塗っておけ。疫病はよけて通過する、と。ユダヤ人と日本人の相似が言われる所以にも通じる)。疫病の流行や夏の食中毒もスサノオが怒ったからだと考えた。それほど恐ろしい神なのである。



八坂神社神楽殿 色街の店の提灯がずらりと並ぶ ▶